

# ニクラス・ルーマンの「構成主義」における「時間」の問題

## ——「時間の社会学」の構想と併せて——

神戸大学 梅村麦生

### 1 研究の背景

現代社会学における分析枠組のなかで、中心的な役割を果たしているのが社会的な「構成」（ないし「構築」）という概念である。特に1960年代以降、世界中でさまざまな社会運動が展開され、旧来の差別や制度への反対運動がなされていく中で、それらがいかに「社会的に構築」されたものであるかを説く社会問題の「構築主義」や言説分析の「構築主義」が現れた。また往時に流行した「機能」主義や「構造」主義に対する反論として、社会が確固たる「構造」をもつのではなく、人々によって不断に「構成」されるものであると説く社会理論も現れてきた（※以下、「構築」と「構成」の語（英語ではどちらも construction）を基本的に「構成」で統一する）。

しかし、今日までの展開を振り返ると、「社会的構成」をめぐる議論群において、さまざまな社会現象が「構成」されたものとされることで、この「構成」が指す内容が多義的になり曖昧になっており、さらに旧来の概念に対する批判として（いわば「闘争」概念として）「構成」概念は登場したが、この概念自体の積極的意義がはっきりとしない、といった点で曖昧さを残している。

### 2 研究の目的・対象

以上のような「社会的構成」の概念を整理し、そこに含まれる一貫した構想と今日的な意義を見出すための土台として、本報告ではドイツの社会学者ニクラス・ルーマンの「構成主義」の理論をとりあげて分析する。特に対象として、「構成主義の認識プログラムと未知のままのリアリティ」（Luhmann 1990）という論文に注目する。併せて、ルーマンの「構成主義」の理論は「時間」についての特有の視角を含んでおり、またルーマンの時間論にはアルフレート・シュッツの意味分析が寄与しているため、ルーマンによる時間論に関する他の論文と、シュッツによる「意味構成」の議論も参照する。

### 3 結果・結論

以上の研究から社会理論における「構成」の議論に関して得られた結果は、以下のようにまとめることができる。

(1) 社会理論における「構成」の概念には、従来の社会理論の「二元論」的傾向を批判し、その対立を媒介ないし代替する過程に注目する、という意図がある。

(2) 「構成」概念には、「時間」について特有の視角が含まれており、「社会的構成」の内容には、現代に特有の時間性があるという含意がある。

(3) 「構成」は現代に突如現れた概念ではなく、近代の社会（科）学論のなかで提起された諸構想が混ざり合って発生した概念であり、分析に際して時間的要素を強調する概念である。

結論として、「社会的構成」「構成主義」の構想は、単に社会現象の自明性を疑ったり、旧来の社会理論を「脱構築」したりする点のみならず、社会現象に関して時間の要素に注目し、現代社会に特有の時間性について喚起させる点で今日的な意義を有している。

### 文献

Niklas Luhmann, 1990, „Das Erkenntnisprogramm des Konstruktivismus und die unbekannt bleibende Realität“, *Soziologische Aufklärung 5 : Konstruktivistische Perspektiven*, Wiesbaden : VS Verlag für Sozialwissenschaften, 31-57